

伝統守り、つなぐ

仙台七夕まつり

8月6日・7日・8日



夏の風物詩が帰ってきました

伊達政宗公の時代から続く仙台七夕。無病息災や商売繁盛など、七つ飾りの一つ一つに願いを込め、現代まで受け継がれてきました。

昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大で七夕まつりが中止となりましたが、市内各地の商店街では、七夕の雰囲気を感じても感じてほしいと、ミニ七夕飾りや昔ながらの素朴な七夕飾りを飾り、伝統をつなげてきました。

今年は、中心部商店街のアーケード内に飾られる大型の七夕飾りの数を、例年の約300本から4分の1程度に減らすなど、規模を縮小して開催されます。勾当台公園市民広場などでのイベントは中止するほか、吹き流しを地上から2メートル以上の高さに飾り付けるなど感染対策を実施。例年とは七夕まつりの形こそ変わるものの、飾りの美しさは変わらずに街中を優雅に彩ります。

また、七夕まつりの前夜祭として行われてきた「仙台七夕花火祭」は密を避けるため、8月5日にオンラインで開催。ご自宅でお楽しみいただけます。

人々の願いや祈りとともに継承されてきた七夕まつり。七夕への思いを未来へつないでいきます。

歴史と伝統を絶やさないために今できることを

明治16年に創業し、紙の卸売事業を展開する鳴海屋紙商事は、市中心部商店街の約半数の七夕飾りの制作や材料の供給に関わっています。高校生のときから七夕飾りの制作に携わり、さまざまな現場を経験してきたという部長の鳴海幸一郎さん。中でも印象に残っているのは東日本大震災が発生した年の七夕まつりだと話します。「市内の小・中学生が制作した、8万羽の折り鶴の吹き流しを飾りました。孫を肩車して見に来たおじいちゃんや母校の短冊を探す方、そんな姿を見て、心が震えましたね。みんなの復興への『願い』

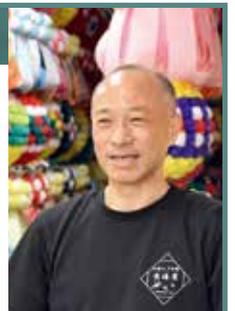


▲復興への祈りと感謝を込めて制作された折り鶴の吹き流し（平成23年8月）

が形になって、まさに仙台七夕の原点だと感じました」と振り返ります。

七夕まつりは市民には「心のよりどころ」であり、お店にとっては「心意を表すもの」と熱く語る鳴海さん。昨年は、コロナ禍で

中止となりましたが、商店街に小さな七夕飾りを飾りました。「細い線でもいいから伝統と文化をつなげていかないと。老舗としての責任ですね」と話します。「今年は、飾りの数や高さなど、さまざまな制約がある中での七夕まつりです。不安もありますが、飾りの見せ方など、商店街の皆さんと知恵を出し合って、新しいスタイルの仙台七夕ができるのではと期待もしています。このコロナ禍でできる全てをぶつけていきます」と力強く抱負を話してくれました。



鳴海屋紙商事(株)部長
鳴海 幸一郎さん



▲心を込めて一つ一つ手作業で七夕飾りを制作しています



▲鳴海部長と制作スタッフの皆さん

掲載内容は、7月16日現在。新型コロナウイルス感染症の状況によって、内容を変更する場合があります。

この特集に関するお問い合わせは、観光課 ☎214・8260、FAX214・8316

仙台七夕花火祭について詳しくは、青年会議所ホームページ <http://www.tanabata-hanabi.jp/2021/> をご覧ください